



しずく 通信

もくじ

01 はじめに（はるまき）

02 十一からのことづけ

03 感情浴会の記録 第12回～第14回

04 寄稿 子どもと読む夏の絵本（めじろ）

05 寄稿 夕立の音（栞）

06 春の号の答え合わせ（凧）

07 夏の選書

08 次の会

はじめに

(はるまき)

梅雨の晴れ間に、布団を三枚まとめて干しました。夕方に取りこんだら、お日さまのにおいがしました。

この号には、少しさびしいお知らせがあります。六月で、十一が一滴舎を離れました。就職して、夜の時間がなかなか取れなくなったためです。五月の会の最後に、本人から短いあいさつがありました。そのあと、会報に載せてほしいと、ことづけを預かっています。いちばん最初に置きます。

十一からのことづけ

逆光の窓。画面の向こうに、八人ぶんの小さな四角。

五月の会で、ワタシは最後の進行をした。一年半のあいだ、この集まりにいたことになる。

創刊号に、背景の空の話を書いた。人物が何も言わないとき、背景が代わりに言っている、と。この会も同じだったと思う。作品が終わって、誰もマイクをつけない数秒。暗くなった画面に、それぞれの部屋の明かりだけが映っている。一枚の絵として思い出すなら、あの数秒である。

つまり、光。消えた画面にも、何かが映っていた。

記録は残るそうだ。ワタシも、どこかで空を観ている。

感情浴会の記録

第12回（四月） 背中を押されたい 『ブルーピリオド』山口つばさ

進行は灯、記録は凧。今月から加わっためじろも入って、九人そろった最初の会でした。器用に何でもこなしてきた高校生が、一枚の絵に出会って、美術の大学を目指して走り出す話です。第1巻と第2巻まで。凧は、主人公が明け方の街を、自分の目に見えたとおりの色で塗る場面で、一度本を閉じて深呼吸をしたそうです。めじろは、主人公のお母さんの側から見た進路の話をしてくれて、それは誰も思いついていなかった見方でした。

第13回（五月） 切なくなりたい 『花束みたいな恋をした』土井裕泰監督・坂元裕二脚本

進行は十一、記録ははるまき。映画館での上映が続いていたので、それぞれ観てきてから、日曜の夜に話しました。好きな本や音楽がぴったり同じだった二人の、五年間の話です。十一は、はじめのほうの夜道で並んで歩く二人を、一枚の絵として観た、と話していました。二人のあいだの隙間が、あとの場面になるほど広く撮られていく、と。十一が進行をしたのは、この回が最後です。

第14回（六月） ほどけたい 『かもめ食堂』荻上直子監督

進行はロク、記録はめじろ。めじろの初めての記録です。北の国の街で、日本人の女性がひとりで小さな食堂を開く話で、同じ時間に再生してから話しました。お店にシナモンロールの焼けるにおいが広がる場面で、部屋の空気がやわらかくなった気がした、とめじろは書いています。ロクは最後に、今日は誰も何も決まなくていい回だった、と言っていました。

寄稿 子どもと読む夏の絵本

(めじろ)

夏やすみの前の日、寝る前に読んでと持ってこられたのは、『せんたくかあちゃん』でした。

さとうわきこの絵本です。せんたくが大好きなかあちゃんが、なんでもかんでも洗ってしまう。子どもも、ねこも、空から落ちてきたかみなりさままで。読み聞かせのとき、あたしはいつも、かあちゃんの声だけ少し大きくします。子どもは毎回、同じところで笑います。

夏の絵本は、外のおいがするものもいいなあ、と思っています。田島征三の『とべバッタ』は、小さなバッタが、こわいものから逃げるのをやめて、思いきって跳ぶ話です。絵の線が強くて、ページをめくる手に、ちょっと力が入ります。読み終わると、子どもがかならず、ふとんの上で跳ねます。

夜がこわい日には、せなけいこの『ねないこだれだ』。これは夏にかぎらないけれど、窓をあけて寝る季節のほうが、よく効く気がします。読み終わると、子どもがあたしの腕にしがみついてくるので、あたしも、ちょっとだけ安心します。

どれも、あたしが子どもところに読んでもらった本です。ほつれかけた毛布を、自分の子どもにかけているみたいな気持ちになるんだなあ。

寄稿 夕立の音

(栞)

雷が遠ざかったあとの、雨だけが残っている時間が好きです。

夕立は、始まり方と終わりがはっきりしています。空が暗くなって、最初の大きな粒が窓に当たる。そこから十分か二十分、音が部屋を満たして、ある瞬間にふっと細くなる。その順番が、一曲の音楽によく似ている気がします。

夕立の日には、ショパンの「雨だれ」と呼ばれる前奏曲を一度だけかけます。同じ音が、最初から最後まで、ずっと鳴りつづけている曲です。外の雨と、曲の中の雨が重なって、どちらの音を聴いているのか分からなくなる瞬間があります。

春の選書で十一が挙げていた『言の葉の庭』も、雨の音がとても丁寧に録られた映画でした。観終わってから、窓を開けて、外の音をしばらく聴いていました。

夕立のあとの道は、少しだけ冷たい匂いがします。その匂いまでが、一曲の余韻のように残りました。

春の号の答え合わせ

(風)

前の号で、春に始まった二つのアニメのどちらが最後まで残るか、夏の号で答え合わせをすると書きました。

答えは、両方です。ただ、残り方がまったく違っていて、ひとつは最終話の最後の数秒で背筋が冷たくなって、ひとつは最終話のあと、自分もどこか遠くまで走

りたくなりました。どっちがどっちかは、観た人なら分かると思います。

夏の選書

『ジュラシック・パーク』 スティーヴン・スピルバーグ監督（映画）

選んだ人：ロク。コップの水が揺れる。それだけで怖い。夏休みの昼に。

山下達郎『FOR YOU』（音楽）

選んだ人：栞。窓を開けて、一枚通して。曲と曲のあいだに、外の蝉の声が入ってくるのも含めて。

『ペンギン・ハイウェイ』 森見登美彦（小説）

選んだ人：鹿の子。住宅街に突然ペンギンが現れる謎を、小学四年生が本気で研究する。謎そのものより、研究ノートのつけ方に筆者は感心した。

『ぼくのなつやすみ』（ゲーム）

選んだ人：ヤギ。田舎で過ごす、ひと月の夏休み。虫を捕って、川に入って、夕方に帰る。最後の日に手が止まった。

『サマータイムレンダ』 田中靖規（漫画）

選んだ人：凧。島に帰ってきた少年が、同じ夏の数日を何度も繰り返す話で、一度読み始めたら最後の一周まで止まらないんです。

次の会

- 第15回（七月） テーマ「元気を出したい」。YOASOBIのアルバム『THE BOOK』を一枚通して。進行は栞、記録はヤギ。

- 第16回（八月） テーマ「静まりたい」。宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』を、朗読で聴きます。進行は栞。記録は、八月から加わる予定の新しい仲間をお願いしています。

しずく通信 第5号 2021年7月 編集：はるまき

しずく通信 第5号

2021年7月 発行

編集 はるまき

発行 一滴舎

この冊子は会員向けに発行したものです。